

# 歌に触れる

遊縁の衆(人生を数倍楽しむ会)

◎十一月十四日(第二回)

(佐藤 紀之)

急カーブ 視界に飛び込む 彩りに 心も秋色 染まり走れる

「Life is short」の 言葉を及芻し 足湯につかると もみじの葉散る

炬燵にて 横臥す我は 畳這う 蜂の行く先 じつと見ており

小指ほど 実れる満願寺 シシトウに 語りかけたる 母の喜び

茶の間にて 咳をこらえる 母の背の 小ささ障子の 隙間より見ゆ

玄関を 開ければはらりと 秋便り 木枯らし運んだ 郵便配達

(佐藤 志亮)

秋風に 舞い散るもみじの 舞踏会 簾をとめて 時を感じる

(松田 昌泰)

廃校の 跡地に降りて 土に触れ 佇む我に 鐘の音聞こゆ

(黒沼 貞志)

新幹線 車窓の先の 錦秋に 思わず止まる 弁当の箸

「食の甲子園で詠める四首」

甲子園 集う生徒の 食の縁 迎える秋の 色の深まり

ホスト校 笑顔で迎える 前夜祭 彩り深き 蔵王の秋

ふるさとを 調理に籠める 九十分 つながる想い 深まる絆

甲子園 審査結果の 講評で 想い伝わり スタッフ破顔